天使と悪魔の
禁忌（エッチ）な黙示録
竹内けん
イラスト
ダイアル
試し読み版
2DB
二次元ドリーム文庫

登場人物紹介

アイム

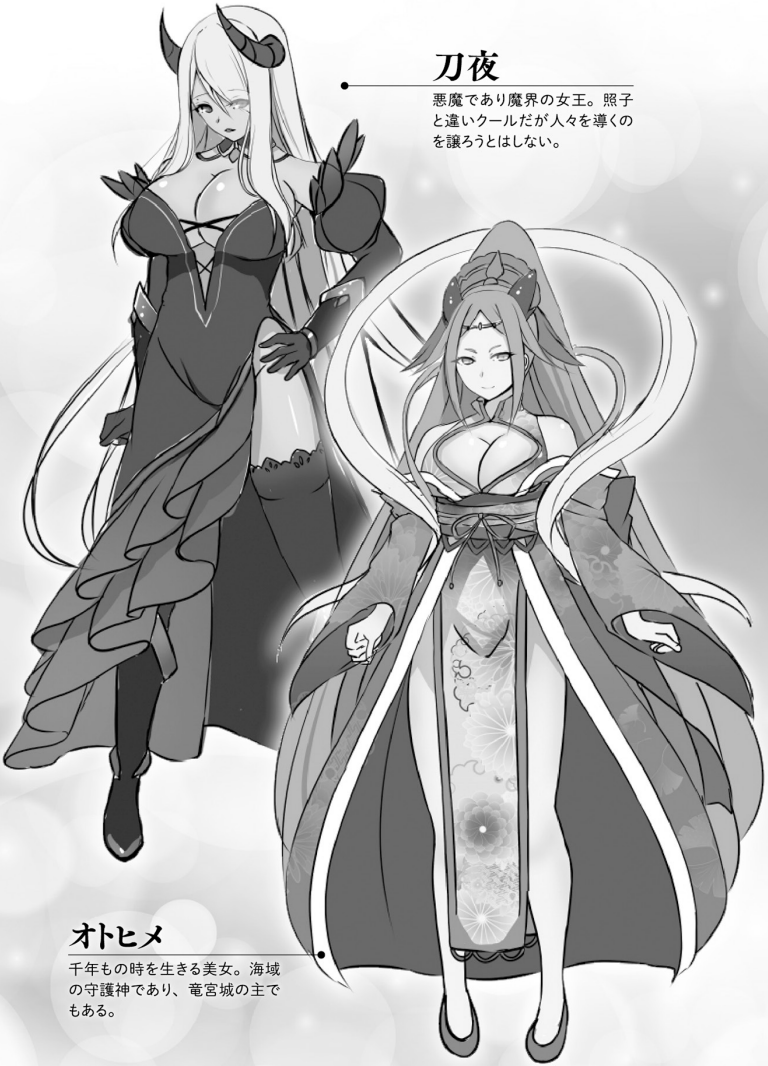
村の少年たちみんなの初恋の相手と言われる少女で海泡神社の巫女。説教癖がある。

照子

天使たちの頂点たる天界女王。自信過剰な振る舞いが多く武闘派。負けん気が強い言動が目立つ。

タケル

村で漁師をして生活している。変なところでちょっと真面目な少年。



刀夜

悪魔であり魔界の女王。照子と違いクールだが人々を導くのを譲ろうとはしない。

オトヒメ

千年もの時を生きる美女。海域の守護神であり、竜宮城の主でもある。

第一章　竜宮城へようこそ　007
第二章　神様復活　049
第三章　神々の屈辱　086
第四章　封印　132
第五章　ぼくにできること　170
第六章　仏ほっとけ、神かまうな　215

さすがに赤面したオトヒメは、部下たちに向かって反論する。
「そう言うおぬしらとて、順番待ちしておるではないか？」
「ええ、お相伴にあずかりたいですわ。一目見たときから、その子はただ者ではないと分かりましたわ。こう子宮が熱くなって、下がるのを感じましたわ」
「まったく、はしたないのはどちらじゃ」
照れ隠しに怒るオトヒメに向かって、女官たちは肩を竦める。
「あら、親は子に似る、臣下は主君に似る、と申します。わたくしたちは女王さまの忠実なしもべという証でございますわ」
部下たちの言い分に、さすがのオトヒメも呆れた表情になる。
「まぁ、よいわ。しかし、一番槍はわらわぞ。それだけは譲れぬ」
「はいはい、分かっていますよ。その代わり、タケルさんにアドバイスをすることは許してくださいね。タケルさん、オトヒメさまはクリトリスも弱いですが、膣派なんですよ。穴に指を入れたらいいと思いますよ」
「おぬしらぁぁひぃぃぃぃ、そこ違〜〜〜う♪」
部下たちの言葉に怒ったオトヒメだが、直後に素っ頓狂な声をあげた。
「うわ、いきなり、アナルに指入れちゃったんだ」
周りのオネエサマたちのアドバイスに従って、タケルは右手の人差し指をシワシワの穴

えっちシーン
読み
ここから
スタート!

に押し入れたのだが、どうやら間違ってしまったらしい。
「ご、ごめんなさい」
涙ながらに謝るタケルを、周りの女官たちがなだめる。
「いいっていいって、生意気な女はアナルから落とすというのは正解よ。タケルくんってば才能あるわ。アナルに入れた指はそのままに、もう一つの穴に舌を入れちゃおう。トロトロと熱い蜜をいっぱい垂れ流している卑猥な穴があるでしょ。そこに舌を入れて、グリグリに掻き混ぜるの。できる？」
「はい。やってみます」
タケルにはこれが夢としか思えなかった。せっかくこんなにいい夢を見ているのだ。思いっきり楽しまねば損であろう。
なにをやらされているのか分からないが、綺麗な女性の肌に触れるのは楽しいし、舐めまわすのはもっと楽しい。
いくら触っていても飽きないのだ。
女体の新しい楽しみ方を教えてくれたお姉さんたちに感謝しつつ、タケルは指を入れている孔をそのままに、膣穴に向かって思いっきり舌を押し入れた。
ズボリ……！
「ひぃ、舌。長い、なんて長い舌なのぉ♪」

動揺の声を出しながらも、オトヒメが歓んでいることは伝わってきた。
嬉しくなったタケルは無心に舌で掻き混ぜ始める。
「ひぃ、そんな中を掻き混ぜられたら！　いい！　すごくいい♪　オマ〇コの中、舐めまわされている♪　あはっ♪　オマ〇コの中がすべてぇぇぇぇ♪」
百戦錬磨の女傑を気取っていたオトヒメが、我を忘れた嬌声を張り上げているのが面白く、タケルは調子に乗った。
膣洞の内側すべてを舐めまわすように、思いっきり舌を押し込んで舌を動かす。
「気持ちいい♪　気持ちいい♪　気持ちいい♪」
年端もいかない少年に舐めまわされて、千年を生きていると自称する竜姫は我を忘れて、痙攣している。
「うわ、姫さまったら、イキっぱなしになっちゃったんだ。すごいアヘ顔♪」
「千年のときを生きている古竜たるお方が、生まれて十数年の人間の子供に舐められただけで、なんという痴態」
周りで見守る女官たちは、切なげに内腿をこすり合わせる。
「ああ、わらわだけこんなに気持ちよくされるだなんて……。さぁ、坊やも気持ちよくなっておくれ」
年上の女として、プライドを刺激されたのだろう。オトヒメは両手で、タケルの腰を掴

むと、ぐいっと持ち上げてきた。
顔面に女性器を押し付けられたまま、タケルは下半身だけ高く持ち上げられる。
オトヒメは簡単にやってのけているが、人間の女ではありえない膂力だ。
そして、いきり立つ少年の逸物を愛しげに眺める。
「ああ、それにしても、何度見ても美味そうなおちんぽさまじゃ。さぁ、白子を飲ませておくれ」
いきり立つ包茎男根を口に含んだ。
(あ、なに、おちんちんがトロトロとした液体に包まれて、こねまわされる)
年若く、身体も小さいタケルの逸物は、勃起したとてたいした大きさではない。オトヒメに根元まで丸のみにされてしまったのだ。
(き、気持ちいい♪)
予想もしたことのなかった快感に、タケルは惚けてしまった。
チューチューと存分に逸物を舐めしゃぶったオトヒメは、いったん口を離す。
「はぁ〜、なんと美味なおちんぽさまじゃ。しかし、意外としぶといの。こんなに若いおのこなのだから、我慢などきかず、ビュービュー出しまくってくれると思っておったのじゃが。ふむ、精通前というのはこのようなものなのか？　わらわもまだまだ勉強が足りぬ」
なにやら、独りで納得したオトヒメは、今度は勃起してなお大量に余っている包皮の先

端に舌を押し入れる。そして、尿道口を舐めた。
「ひぃ」
もちろん、一度も剥いたことのない包皮だ。その中身を舐められるという強すぎる刺激に、タケルは震えた。
「や、やめて、痛いです」
同意もなしに逸物を悪戯されていたときは不快ではあったが、気持ちよかった。しかし、今度は純粋に痛みだ。タケルは本気で逃げようとした。
「駄目じゃ。包茎おちんちんを剥くのは、童貞狩りの醍醐味じゃ」
竜人のオネエサマは容赦なかった。長い舌を使って器用に、包皮を剥いていく。
ズルリと白っぽい亀頭部がずるむけになる。
「おお、これはこれはチンカスだらけではないかや。これだから若い男は仕方がないの。わらわが綺麗にしてしんぜよう」
ペロリペロリペロリ……！
赤い舌を伸ばしたオトヒメは、亀頭部を丁寧に舐め清める。
「ひぃ、ひぃぃぃぃぃ」
「ああ、美味い。なんと美味なチンカスじゃ。こんな美味なおちんぽは初めてじゃ。わらわの目に狂いはなかったの」

チュパチュパ、ズルズルズル!!!

オトヒメは夢中になって亀頭部をしゃぶる。

（い、痛い。でも、気持ちいい。おちんぽ気持ちいい♪）

まだ初恋すら満足に知らない少年である。精通すら経験したことのない身では、性欲すら分からない。

それなのに、綺麗なお姉さんの生殖器を無理やり舐めさせられ、さらに包茎を剥かれて、舐めしゃぶられたのだ。

もはや、頭の中が真っ白だ。

タケルは舌を動かすことができなくなり、尻の穴に右手の人差し指を、膣穴に舌をツッコんだまま放心していた。

ゾク……！

オトヒメにしゃぶられている逸物から、かつて感じたことのない痺れるような体感が襲ってきた。

その体感の意味を悟ってタケルは焦る。慌てて膣穴から舌を引き抜いて叫ぶ。

「あ、ダメ、オトヒメさま、お、おしっこでそうです。だから、トイレに行かせてください」

相手が好んで逸物を口に咥えているとはいえ、その状態で放尿するのはいくらなんでも

失礼にすぎる。まして、相手は誇り高い竜の姫。しかも、命の恩人だ。
おしっこをぶっかけるわけには決していかない。
しかし、オトヒメは逆に嬉しそうに叫ぶ。
「よいぞ、よいぞ、わらわが飲んでくれる。坊やの精通をわらわが飲んでくれる。このまま出すとよい」
「いや、ダメです。ダメ、ダメ、絶対だめぇぇぇぇ」
オトヒメがなにを望んでいるのか、理解できなかったタケルは必死に、放尿を我慢する。
しかし、かつてない勢いで尿意は襲ってきた。
「もう、ダメだ。おしっこでちゃう。ごめんなさい――――ッ!!!」
ビクンビクンビクン
謝罪の叫びとともに、小さな逸物は激しく痙攣を起こした。タケルが生を受けてから十年と幾年月。尿道を、小水以外の液体が初めて駆け抜けた。
ドビュッ！　ビュッ！　ビュッ！　ビュッ！
「うむ、うむ、うむ」
勢いよく噴出する少年の体液を、オトヒメは必死に口腔で受け止める。
それと同時だった。タケルの眼前でも、ぶしゃっと大量のお湯があふれた。
タケルにはなにが起こったか分からず呆然としていると、事態を悟った周りの女官たち

証だ。
そこにアイムが立ち上がり、昂然と申し出た。
「わたしが、わたしが贄になります」
「これ、アイム、そのように軽々しく」
巫女長は窘めたが、毅然とアイムは首を横に振るった。
「いえ、わたしも海竜神様と同じ思いです。あの天使だ悪魔だと名乗る厄災に、一矢報いたいのです」
ニヤリとオトヒメは人の悪い笑みを浮かべる。
「うむ、よい覚悟じゃ」
しかし、続いてアイムの見舞いに来ていた巫女たちが次々と立ち上がった。
「お待ちください。わたくしも贄になります」
「いえ、わたくしがやります」
「神々の横暴に腹を立てていたのは、アイムさんだけではありません」
競うように五人ばかりの巫女が進み出た。
「これ、お前たちいい加減になさい！」
巫女長は窘めたが、若い巫女たちは止まらない。頬を赤くして強く主張する。
「け、決してやましい気持ちはありません」

えっちシーン試し読み ここからスタート！

「そうです！　決してタケルくんがかわいいから、という理由ではありませんから」
強調すればするほどに、その女たちは少年愛に胸を躍らせているように見えた。
そこに冷や水を浴びせるように、オトヒメは語る。
「一応、忠告しておくぞ。神のお逸物を体内に受け入れるのじゃ、なにが起こるか分からぬぞ。最悪、腹が裂けて死ぬこととてありうる」
「……」
これにはみな息を呑んだが、すぐに開き直る。
「心得ました。しかし、竜姫さま、わたくしたちの覚悟を侮ってくださいますな。神を降臨させる巫女となれるならば、命など惜しくはありません」
「生贄として死ねることこそ本望です」
巫女たちの言葉に、オトヒメは頷く。
「みな、よい度胸じゃ、気に入ったぞよ」
ひょいっと揺り椅子から立ち上がったオトヒメは、アイムをはじめとした巫女たちの顔をしげしげと見てまわる。
「みなかんばせはなかなか美しいの。わらわには及ばぬが、人間にしてはなかなかじゃ」
「あ、ありがとうございます。あと確認しておきたいのですが、わたしたちがわたしたちの都合で一命を落とすのはかまわぬのですが、神を降ろすタケルくんの身体には大事はご

ざいませんか？」
　堅苦しく確認してくるアイムに、オトヒメは軽く目を瞠る。
「それは大丈夫じゃろう。炎が炎を焼くことはありえぬ。ふふ、心映えもなかなかに美しい娘じゃ。しかし、それだけでは贄としての役はこなせまいぞ」
「承知しております。わたくしは生娘でございますから、贄の役、相応しいと存じます」
　真面目に応じるアイムに、オトヒメは意地悪そうに語る。
「検査させてもらうぞよ。人間のおなごの貞操ほど当てにならぬものはないのでの」
　巫女だから処女とは限らないのが世の常である。
　天使と悪魔の事例を出すまでもなく、聖と俗は表裏一体のものだ。
　世に神聖と呼ばれる場所の傍には、歓楽街が付き物である。
　当の寺院ですら、人の目を驚かせる芸術品の塊だ。その上、富籤が売られ、歌舞伎が上演され、祭りが行われる。つまり、アミューズメントパークという側面があるのだ。そして、人が集まれば当然、娼館もできる。巫女、尼僧、修道女といった世に聖女と呼ばれる女性たちが、隠れて娼婦や愛人をやっている事例は珍しくもなかった。
「ご存分に」
「ならば袴をたくし上げよ」
「はい」

我こそが神の生贄になろうと、アイムたち巫女五人は行燈型の緋袴をたくし上げた。
（うわ、お姉ちゃんたち、なにしているんだろう？）
普段は隙なく巫女装束を纏っている綺麗なお姉さんたちが、一斉に緋袴をたくし上げた光景に、タケルは目を白黒させてしまう。
見てはいけない光景を見てしまったような後ろ暗さを感じるが、なぜか目を離せない。
（お姉ちゃんたちにはおちんちんないんだ？　それに股間から毛がモジャモジャ生えている⁉）
いずれも正式な巫女である。ショーツのごとき無粋なものは穿いていない。
よって、いきなり黒光りする陰毛があらわとなってしまった。白い肌に、黒い毛はよく映える。
五人の中でアイムの陰毛が、一番、繁茂面積が狭く、薄い。そのため、亀裂が透けて見えた。
「では、確かめさせてもらおうかの」
妖しい微笑をたたえたオトヒメは右手の中指を、軽く自らの口に含み、涎に濡らしてから、アイムの陰部へと添えた。
「くっ」
泰然自若としていたアイムの顔が、さすがに歪む。

ズボッと指が入る。
「ふむ、この指にあたる感触。まごうことなき処女膜じゃな。真面目な顔をして、本当に真面目な娘のようじゃな。どうやら、オナニー経験もあまりないようじゃ」
「はぁ……、はぁ……、はぁ……ありがとうございます」
「よし、次じゃ」
スポッとオトヒメが指を抜くと、アイムの白い内腿をツーと透明な液が滴った。
その後も、四人の生贄志願者の処女検査が行われる。
「よかろう。五人とも合格じゃ。いずれも正真正銘の生娘たちじゃ」
「はぁ……、はぁ……、はぁ……」
屈辱的な体験に耐えられず、若い巫女たちは、みなその場で腰を抜かしてしまった。
「ついでじゃ」
悪戯っぽく笑ったオトヒメは、部下たちの痴態を呆然と見守っていた巫女長の緋袴を唐突にたくし上げて、膣穴に指を突っ込んだ。
「おぬしは貫通しておるの。部下たちの代わりに名乗り出られぬはずだわ」
「はぁぁぁん、申し訳ありませんぅぅぅ」
「別に謝るには及ばぬよ。おぬしのような成熟した牝に膜があったら、それはそれでドンビキじゃわ」

オトヒメの指マンは巧みで、しっとりとして美しい大人の女性は、あっさりと絶頂して崩れ落ちた。

恥じ入る巫女長を横目に、オトヒメは腕組みをして、右手で顎を摘みながら思案顔になる。

「ふむ、困ったの。いずれの娘に大役を任せようかの？」

オトヒメの前で、我に返った五人の若く美しい巫女は、居住まいを正して正座をする。

「巫女長さま、大丈夫？」

他の巫女五人とは明らかに違った巫女長の乱れぶりに心配したタケルが声をかけたものだから、巫女長は慌てて身なりを整える。

「いえ、大丈夫です。こ、子供の見ている前でこのような痴態を」

そんなやり取りを横目に、なにやら閃いたらしいオトヒメは手を打つ。

「ここはやはり、本人に選ばせるのがスジであろうな。ぬしさまや、どのおなごが好みかや」

「そ、そんな……こと言われても」

海泡神社の境内は、タケルにとっての遊び場だ。巫女のお姉さんたちはみんな大好きである。好みなど言えるはずがなく、困ってしまう。

「なに、ぬしさまの本能のままに決めてよいのじゃ。とりあえず、おっぱいを触って決め

てはどうじゃ。好きであろ。おっぱい」
「……はい」
オトヒメの乳房に喜々としてしゃぶりついてしまった身としては、いまさら否定できない。タケルは恐る恐る、正座して並んでいる五人の巫女さんたちに近づくと、とりあえず白布に包まれた乳房に手を伸ばす。
白い衣の上からちょんと乳房を触れると、ぷるんぷるんと揺れた。
「おお♪」
感嘆するタケルのさまに、オトヒメは呆れる。
「これこれぬしさまや、遠慮はいらぬ。こやつらはぬしさまの贄じゃよって、ガバッといってしまうとよい」
そう言ってアイムの後ろに立ったオトヒメは、アイムの白衣の襟に両手をかけると、ぐいと左右に開いた。
ぽろりと生乳（なまちち）が飛び出る。巫女たるものブラジャーをつけないのが作法だ。
「キャッ」
さすがに瞬間、悲鳴をあげてしまったアイムだが、すぐに表情を引き締めた。
これは神に捧げられる贄役を選ぶための試験である。動揺するほうが恥ずかしいと考えたのだ。

他の巫女たちもまた、同じ思考をたどったらしく、みな上半身裸となりながらも、泰然自若としている。
しかしながら、タケルはそうもいかなかった。
「お、おおおっぱい♪　……ごくん」
歓喜の悲鳴をあげたタケルは生唾を飲みながら、五人、合計十個の乳房を、目を皿のようにして見比べてしまう。
アイムの乳房は、お椀を伏せたような完璧な半球形。乳首は梅の花のように赤く、乳輪は小さい。
大きい小さいの違いはあるが、いずれも魅惑的な白い宝石のようであった。
おっぱい丸出しとなった巫女たちは、無垢なる少年の好奇心に満ちた視線を浴びながらも、正座してじっと耐える。
巫女たちは真面目な顔を保っているが、いずれの乳首も少しずつ膨らんできて、ついにはみなビンビンに勃起させてしまった。
「しゃ、しゃぶっていいの？」
「もちろんじゃ、ぬしさまの好きなようにするとよいぞ」
「そ、それじゃ」
おっぱい丸さらしの巫女たちに、目を輝かせてタケルはさらに近づく。

「タ、タケルくん？」
興奮する少年とは裏腹に、正座するお姉さんは若干引き気味の表情になったが、制止する暇もなく、タケルはいきなり、アイムの左の乳首に吸い付いたのだ。そして、チューッと吸引する。
「あくっ」
生まれて初めて乳首を吸われたアイムは、動揺の声をあげる。
「あれ？」
「どうかしましたか？」
乳首から唇を離したタケルが怪訝な表情をしたことで、アイムもまたいささか不安な表情になる。
「アイムお姉ちゃんのおっぱいからは、美味しい汁出ないんだね」
「そ、それは出ませんよ。わたしは未産婦なのですから」
まさかオトヒメに母乳を飲まされたなどというタケルの経験を知るはずもないアイムは仰天する。
「？？？」
タケルは確かめようと、隣の巫女お姉さんのおっぱいを吸う。そして、次、次、と吸っていく。

「ああ♪」
いずれのお姉さんも、タケルに乳首を吸われて、恍惚となる。しかし、すぐさま周りの目を気にして、表情を引き締める。
ただし、いかに表情を取り繕おうとも、頬が紅潮しているのは隠しきれない。
タケルは念入りに、いずれのお姉さんの乳首も、左右ともに吸ったが、だれからも母乳を飲むことはできなかった。
（オトヒメさまみたいに、甘い汁は出ないけど、みんな美味しい♪）
液体としてはなにも出ていないのだが、綺麗なお姉さんの乳首からは、物質ではないなにか別のものが出ているらしく、タケルの脳は多幸感に包まれた。
そんな光景を見守っていたオトヒメは、高らかに笑う。
「くっくっくっ、ぬしさまも男の子よの。おっぱいが大好きと見える。さて、どうやら、結論が出たの。ぬしさまはおぬしが一番のお気に入りのようじゃ。おぬし名前をなんと申す」
「ア、アイムと申します」
タケルにもっとも執拗に乳首を吸われた少女は、いささか惚けた表情を浮かべながらもなんとか答える。
「では、おぬしにぬしさまの初穂を刈る大役を任すぞ」

※

「はぁ、気持ちよかった。やっぱり、女神さまたちってみんないいオマ〇コしているよね。まぁ、人間には人間の良さがあるけどね」

その場にいた天使と悪魔を一通り犯し、無様に失神させたタケルは、再び照子と刀夜のもとに戻ってきた。

幾度となく射精したはずなのに、タケルの逸物はまったくぶれずにそそり立っている。

それは単なる若さでは説明できない絶倫ぶりだ。創造主として目覚めて以来、タケルの精力はまったく尽きることがなくなってしまったのだ。

「あは、どうやら、二人とも完全に出来上がっているね♪」

全身の性感帯を柔らかい羽毛で責められ続ける魔界の女王と、女の最大の急所である陰核をひたすら執拗に弄り倒される天界の女王。どちらも先ほどまでの威厳を完全に失っていた。全身の毛穴から汗を流し、白目を剥き、涙を流し、鼻水を流し、口を開き、喘ぎ声とともに涎を垂らしている。

「うわ、この濡れっぷり。どうやら、二人ともおしっこ漏らしたみたいだね。まったく女神さまたちって偉そうにしているわりに、意外とだらしないなぁ」

天使の羽根責めと木馬責めによる、強制的な連続絶頂に照子も刀夜も、体力と精神の限界まで消耗したということだろう。

えっちシーン試読み
ここからスタート!

「もう許して、これ以上、イかされたらおかしくなっちゃうぅ」
「ひぃく、ひぃく、でも、なにこれ、イかされるとイかされるほどに、疼く。身体の芯が疼くの」
すすり泣く二人の訴えに、タケルは頷く。
「まぁ、そうだろうね。女の人の本当に満足のいく絶頂って、おちんちんを入れられたときじゃないと得られないみたいだからね」
膣内射精以外の絶頂というのは、詰まるところ前戯でしかないのだ。
タケルの言葉を聞いて、はっと悟ったような顔になった照子と刀夜は、その股間にいきり立つ逸物を見つめる。
「ちょうだい。おちんちんをわたしにちょうだい」
「入れてください。おちんちんをわたくしの中に入れてください」
あれだけ気高く、人を人とも思わなかった傲慢な女神たちが、痴女の表情で懇願してくる。
イかされまくったことで、彼女たちの持つ霊的防衛力が薄れて、タケルの持つ創造神としての魅力が、ダイレクトに子宮に響いているようだ。
「うん、ぼくもお姉ちゃんたちに入れたい」
タケルは照子を木馬から外し、刀夜にとりついていた羽根を外してやった。

そして、二人の身体をふわふわと浮かせたまま並べて尻を差し出させる。
「うわ、二人ともいい濡れっぷりだね。ぼく、濡れやすい女性って好きだな。グッチョグチョのオマ〇コにおちんちん入れたときって、ほんと気持ちいいんだ」
「あ、ありがとうございます」
「どうぞ、わたくしのオマ〇コをお使いください」
照子も刀夜も、完全にセックス以外のことを考えられない状態になっているのだろう。もはや、女神や女王としての威厳など、欠片もなく淫らに腰を振るって、濡れた陰唇を差し出してくる。
いずれもグチャグチャだ。卑猥の極みであり、神聖さの欠片もない。
(うわ、ぼく淫乱なお姉さんって大好き♪)
といっても、タケルの神力にあてられた女は、人間だろうが、妖怪だろうが、天使だろうが、悪魔だろうが、関係なく子宮の疼きに負けてしまう。
タケルが喜々として逸物を突きこもうとしたとき、ふと思い出した。
「あ、そういえば肝心なことを忘れていた。二人ともう喧嘩しない？」
タケルの質問に、照子と刀夜は互いに横目で見合う。
「それは……無理というものだ」
「天使と悪魔が戦うのは、天地開闢以来の理です」

喧嘩するということで、意気投合する二人の女神を前に、タケルは溜息をつく。
「もう、さっきは仲良く共闘していたくせに、わがままだな。それじゃ、もう少し木馬に乗ったり、羽根で全身を撫でられたり、してみる？」
「ひぃ――――ッ！」
照子と刀夜は同時に、悲鳴をあげた。
「それだけはいやー、おちんちんください。おちんちんくれるならば、なんでも言うことを聞きます」
「はい。わたくしも、おちんちんを入れてくださるならば、断腸の思いでも、こやつとの和解を受け入れます」
二人の言葉に、タケルは安堵する。
「よかった。ぼくも我慢できなかったんだ」
勇んだタケルは、照子と刀夜の足をそれぞれ一本抱えあげて、二人の背中を合わせた形にした。
くぱっと女神たちの陰唇が二つ並んでさらされる。
このような状況では、二人を交互に犯さなければ不公平だ。そのためには入れる穴はできるだけ密着していてくれるほうがありがたい。
ちなみに神域では、上下の概念はなく、そのためどちらが上ということもなかった。股

を開き、背中を合わせたまま、タケルに陰唇を差し出し、双乳を振り乱しつつ、くるくると時計回りに回った。

「どっちに先に入れようかな？　悩んじゃうなぁ」

照子も、刀夜も、外見的にこの上ない絶世の美女たちだ。甲乙つけがたい。

タケルはいきり立つ逸物の先端を、二つの蜜壺の間で行き来させる。

「わたくしにお願いします」

「わたしに入れろ」

発情しきっている刀夜と照子は口々に、懇願してくる。タケルとしても、もはや我慢の限界だ。

「えーと、天の神様の言う通り、よよいのよい」

適当な掛け声とともに、素早く二つの蜜壺の入口を小突いたあと、タケルは一気に腰を進めた。

ブツン！

神聖にして不可侵なる女神の処女膜が破れた。

「はう、気持ちいい♪　あ、なに、開く、子宮が開く、花開いてしまう♪」

嬌声をあげたのは、刀夜であった。

さすが女神さま、破瓜の痛みなどという下界の女のような苦しみとは無縁なようだ。褐

色のスレンダーボディをビクビクと震わせている。
どうやら、入れただけで絶頂しているようだ。
(うお、さすが女神さまのオマ〇コの中、まるでミミズがいっぱいいるみたいにグネグネしている。ミミズ千匹ってやつだ。すごい気持ちいい♪)
ミミズ千匹型の女性は人間にもいるが、それとも一味違うようだ。といっても、どこが違うのかよく分からない。
おそらく、人間同士の肉交とは違う。神力が共鳴しているのだろう。とにかく気持ちいいのだ。
いつまでもとどまっていたいところだが、いまは一人に集中していたのでは、再び喧嘩の火種になりかねない。それを防ぐためにも、二人を交互に犯さねばならないだろう。
タケルは褐色肌のお姉さんの中から逸物を取り出すと、白大理石の肌をしたお姉さんの中へと逸物を入れる。
ブツン!
こちらもあっさりと処女膜は破れた。
ビクビクビク
「う、ウソでしょ。なにこの感じ……す、すごい、すごすぎる♪」
激しく身体を痙攣させながら、照子もまた驚きの嬌声をあげる。

どうやら、こちらも入れただけで絶頂してしまったようだ。
おそらくタケルの逸物の大きさとは関係なく、神力の塊を入れられた感覚であり、神々にとってタケルの逸物は、最終兵器的な威力があるらしい。
（こっちもすごい。入口と中ほどと先っぽで、ぎゅって締めてくる。三段締めのオマ〇コだ。すごいこんな締まるオマ〇コ初めて♪）
あまりにもあっけない女神たちのイキっぷりに驚きながらも、とにかく名器と称えるしかない彼女たちの蜜壺に感動したタケルは、交互に腰を叩き込む。
パン！　パン！　パン！　パン！
「ひぃ、ひぃ、ひぃ、ひぃ」
「あぁ、ああ、ああ、ああ」
儀式として、アイムにやられたのや、その後、貪るように求めてきた女たちとやった感覚とは違う。
あれはあれで気持ちよかったし、巫女や水妖のお姉さんたちは、みんな大好きだったから、嬉しかった。
しかし、あれはタケルの意思が介在していない。完全な棚ぼた体験であった。
それに対して、この照子と刀夜には、牡としての原始的な喜びを感じる。戦いに勝って自分でものにした女たち、という狩猟の喜びがあるのだろうか。

（二人とも滅茶苦茶に感じさせちゃって、ぼくのおちんちんなしじゃ生きていけない女性にしちゃいたい♪）
そんな野望を持ちながら、荒々しく腰を振るっていると、たちまちのうちに限界がきてしまった。
たまらずタケルは叫ぶ。
「そろそろ、いくよ」
「はぁぁ、なにを、ああ、おちんちんがおちんちんがわたしのお腹の中でひぃ……」
「すごい、おちんちんがプルプルしている……あっ⁉」
どびゅ！　どびゅっ！　どびゅゅゅゅゅゅ！
最初の一撃は、照子の中で出した。しかし、射精している途中に気合いで止めると、いったん引き抜き、傍らの刀夜の穴へと移る。
「あああ」
誇り高い女神たちの凄まじい断末魔が響く。
ビクンビクンビクン
激しく痙攣した女神たちは、背中合わせで寄り添ったまま、長い脚を開いてぐったりと

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/

編集・発行 キルタイムコミュニケーション
〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7 ヨドコウビル TEL:03-3555-3431(販売) FAX:03-3551-1208

▶最新情報は公式サイトへ! キルタイムコミュニケーション 検索